

女性のエンパワーメントのための学習機会の拡充 に関する研究

佐々木正治・小池 源吾・白石 義孝・熊谷愼之輔

(1996年9月9日受理)

A Study on Women's Empowerment through Enlargement of Learning Opportunity.

Masaharu Sasaki, Gengo Koike, Yoshitaka Shiraishi and Shinnosuke Kumagai

After the Fourth World Conference on Women (1995), the concept of "women's empowerment" is becoming popular gradually. But the work of developing learning opportunities for women's empowerment is not enough.

The "Women's Hiroshima College" was created by Hiroshima-shi Fujinkyoikukaikan (Hiroshima-city women's education bureau) in 1995. This project is aimed at providing learning opportunity for women's empowerment.

The purpose of this paper is to examine the connection between women's empowerment and learning through the case study of the "Women's Hiroshima College".

This paper consists of the following parts:

- I .Lifelong learning and women's empowerment
 - II .The establishment of Women's Hiroshima College
 - III .Learning program in Women's Hiroshima College
 - IV .Program assessment by the participants
 - V .Outcomes in Women's Hiroshima College
- Conclusion

I. 生涯学習と女性のエンパワーメント

エンパワーメント(empowerment)という言葉は、本来、権限の付与を意味する。しかし、今日の社会教育や生涯学習の文脈において用いられるとき、エンパワーメントは、実際には、社会的に不利な立場にあり、意思決定に参画することができなかつた人々の「力をつける」といった、より広い意味合いをもつ。

そういった意味で、エンパワーメントの概念を使用したのはフリードマン(Friedmann, J.)である。彼は、地域開発の専門家としての立場から、特に、発展途上国において貧困の状態に置かれている人々の「力をつける」ことを重視する。彼によると、貧しい人々は制度的、組織的に力を剥奪されてきたために貧しい

のである。したがって、その力の源となる資源にアクセスする機会を得ることによって、力、とくに意思決定における自律性を獲得し、貧困からの脱出を図ることができると考えた¹⁾。

同様に、女性の学習活動においても、エンパワーメントは重視されはじめた。矢澤澄子も指摘するように²⁾、女性に対してのエンパワーメントという言葉が使用されるようになったのは、1975年の国際婦人年³⁾に始まる「国連女性の十年」以降である。特に80年代の「開発と女性」問題への国連や各国女性NGOの取組みの中から提起され、その後は、第3回世界女性会議(1985年)でまとめられた「ナイロビ将来戦略」(世界行動計画)を受けて、地球規模でのジェンダー問題の解決を方向づける基礎概念として国際舞台で広く用いられている。

女性のエンパワーメントをめぐる論議を概観するに、女性がエンパワーメントを達成する過程として、概ね、次の二つの段階が想定されている⁴⁾。最初の段階は、これまでのグローバルな近代化のなかで、常に社会の「周辺部」に位置付けられ、男性に比して不平等な立場に置かれてきた女性が、男性と同等に独立した社会的個人として、生き方およびその環境としての社会の仕組みについて意思決定を行なう力を養うことを目標とする。ここでは、各種の制度・組織の意思決定を行う集団の外に置かれ、不利な立場にある個人やグループが対象となる。次の段階では、社会的な立場の異なる女性同士が、地球社会の持続可能な発展と継承に向けて連帯することが目標となる。ここでは、情報や資源を主体的に開発し、「力の共有」(powersharing)を進めながら、不平等で環境破壊的なシステムを変革するという、女性のネットワークの形成が目指されている。

さらに、1995年北京で行われた第4回世界女性会議では、全体を「女性のエンパワーメント」というキーワードで表現し、実質的に社会のあらゆる分野で女性が実力を身につけることを目標に掲げた。この会議で確認された特に重要な点は、すべての分野に女性が関与するシステムを作っていくことを宣言した点にある。これは女性の地位を向上させるだけでなく、意思決定に女性が参画することにより、地球環境の破壊を防ぎ継続的な発展(Sustainable Development)を保障するという意味でも重要なものであるとみなされた⁵⁾。

このような世界的動向をうけて、近年、わが国においても、女性のエンパワーメントを意図した学習プログラムの必要性が認識され始めている。しかしながら、既存の学習機会の実態をみると、依然として旧来の趣味・教養を中心とするソーシャルライフ型の学習プログラムが主流を占め、しかも、その大半は入門レベルの域にとどまる。こうした現状をみる限り、本来的な意味での女性のエンパワーメントに資する学習機会が潤沢に保障されているとは言い難い。ここから、女性に対する学習機会のあり方が根本的に問い直されなければならないようになってきた。

そこで、本研究においては、成人女性に対する生涯学習プログラム「ウイメンズ広島カレッジ」をとりあげ、女性のエンパワーメントをねらいとする学習活動の実態と課題について考察する。

II. ウイメンズ広島カレッジの開設

先述したように、女性問題は1975年の国際婦人年を契機に、世界共通の課題として認識されはじめた。以来、わが国においても、男女共同参画社会の構築を目

標として、さまざまな施策が施行されてくる。例えば、1991年5月に決定された「西暦2000年に向けての新しい国内行動計画(第1次改定)」は、(1)男女平等をめぐる意識変革、(2)平等を基礎とした男女の共同参画、(3)多様な選択を可能にする条件整備、(4)老後生活等をめぐる女性の福祉の確保、(5)国際協力及び平和への貢献を基本目標とし、さらに政策・方針決定の場への女性の参画を促進する計画として「およそ平成7年までに国の審議会等の女性委員の割合を総体として15%とすること」を目標に定めている。

しかしながら、実態として、現在にいたっても女性の社会参加や政治参画が十分に促進されてきたとは言いがたい。その背景としては、日本社会において伝統的に形成されてきた家父長制に基づく、家庭・地域・職場などにおける男性優位の社会制度の存在が指摘されねばならないだろう。たしかに、近年、職場においては男女雇用機会均等法や育児休業法などが制定され、男女平等が謳われてきた。しかし、その実態は女性に家事や育児などの旧来の性役割を課したままで、男性と同じ条件での労働を要求するものであり、かえって女性の負担を増加させるといった皮肉な現実も看過してはならないだろう。

また、男性のみならず、女性自身の意識にとり入れられ内面化している問題⁶⁾として、多くの女性が未だに性役割にとらわれていることも指摘できよう。長きにわたって培われてきた性別役割分業意識が、潜在的に女性を消極的にさせ、リーダーシップの発揮や、自己表現の大きな障害となっているのである。

これらの問題を解決していくためには、まず女性たちが自分のなかの女性問題に気づき、問題を発見する力をつける学習が求められる。その上で、さらに問題の背景を読みとく力、問題解決の方法を考えて提案していく力をつける学習機会の提供が必須となってきた。

ウイメンズ広島カレッジは、広島市婦人教育会館が文部省の「女性の生涯学習促進総合事業」の指定を受けたのを契機とし、1995年に開設された。「女性の生涯学習促進総合事業」は、①企画推進委員会設置、②研究開発事業、③男女共同参画アドバイザーの養成、④ウイメンズ・ライフロング・カレッジの開設、⑤男女共同参画社会づくりモデル市町村事業の5事業でもって構成され、地域の実情に応じて2つ以上の事業を組み合わせて行うとしている。そこで、ウイメンズ広島カレッジの開設にあたっては、ウイメンズ・ライフロング・カレッジの開設と企画推進委員会設置の2事業が企図された。因みに、ウイメンズ・ライフロング・カレッジとは、1989年に始められた都道府県・指定都市が高等教育機関との連携のもと、高度で専門的な学

習機会を提供し、情報化、国際化時代に求められる女性リーダーを育成する事業であり、平成5年度は、32県・2指定都市で実施されている。

企画推進委員会は、ウイメンズ広島カレッジの講師を担当する大学教員5名を中心に広島市教育委員会1名と婦人教育会館2名のスタッフの計8名の委員で構成されている。委員の選定にあたっては、本事業が、①従来の公民館・婦人教育会館等の一施設内完結型の学習プログラムではなく、広島市立大学と協力・連携して行われる点、②大学の持つ人的、物的な教育機能を活用し、女性の多様化、高度化した学習要求に即応した学習機会を開設する点、③女性の生涯学習の推進とリーダー等の養成をねらいとしている点、の三点が念頭に置かれている。

受講対象者は婦人教育会館リーダー研修履修者を中心に50人程度とし、実施期間は1995年9月～12月の毎週土曜日の13時30分～16時30分の3時間で、全14回のプログラムの総研修時間は42時間となっている。

また、修了者に対しては、婦人教育会館の施設ボランティアとして、次年度のウイメンズ広島カレッジの運営やその他の講座やリーダー研修の事業企画に参加したり、人材名簿を作成し関係機関等に紹介することが計画されている。

Ⅲ. ウイメンズ広島カレッジの学習プログラム

本事業の意図は、学習活動を通じた女性のエンパワーメントにある。しかしながら、どのような学習を通じて女性がエンパワーされるのか、という点については、いまのところ十分には解明されていない。この点を考慮し、本事業の構想にあたっては、エンパワーメントは経験学習に因るとの仮説的前提に立脚している。ここでいう経験学習とは、女性の受講者一人ひとりの生活経験を自己省察（self-reflection）することによって学習経験に高め、自己を向上させていくことである。その際、既にナイト（Knights, S.）⁷⁾やドロークカムプとテイラー（Droegkamp, J. & Taylor, K.）⁸⁾らも指摘しているように、省察のもつ機能の重要性を見落としてはならない。省察によって自己の経験に新たな解釈を加え、自己を捉えなおし、新たな自己を表現する、とりわけ自己を社会的に表現することが初めて可能となると考えられるからである。

彼らの指摘に共通する点は、生活経験に自己省察を加えて学習経験に高めていくプロセスとして「書く」「話す」「聞く」ことを重視していることである。具体的には、プログラムの受講者たちは、自分の仕事や人間

関係あるいはコースの感想などについて、少なくとも週一回日記やレポートを書くことを求められており、それを次回のクラスにおいて発表することによって省察を行う。受講者たちは期間中継続して日記やレポートを書き、それを読みなおし、またその内容についてお互いに議論することによって、自分の置かれている状況を変えていくための戦略を開発、試行し、そこで起こったことを記録し、省察し、そのことを通してエンパワーメントを実現していくのである。

また、森実も指摘するように、エンパワーメントを実現するためには「表現力を身につけて自己表現と自己主張を始め」ることも重視されている⁹⁾。

このような指摘に鑑みて、ウイメンズ広島カレッジにおいては、毎回のクラス終了時に「ミニ感想」を記入する時間を設けている。これは、受講者と講師との双方向のコミュニケーションに資するとともに、学習の理解度を確認するのに役立っている。修了の要件としては、受講者全員に修了レポートが課せられており、その内容を一分間のスピーチにまとめて全員の前で発表し、意見を交換する場として事後研修が設定されている。

さらに、論理的に「話す」ことによって他者を説得するスキルや、他者の話を理解するための「聞く」スキルを向上させるため、ディベートの実践がプログラムに取り入れられている。

女性のネットワーク形成の視点からは、ウイメンズ広島カレッジOG会が組織され、定期的に勉強会や学習成果を活用していくための方策についての話し合いが持たれている。

このように、学習活動における経験を通して女性をエンパワーするためには、コルブ（Kolb, D.A.）¹⁰⁾やジャーヴィス（Jarvis P.）¹¹⁾の主張を俟つまでもなく、個人経験の学習サイクルに沿った発展を可能にする体系的な学習プログラムを開発していかなければならない。

以上のような理念に基づき、ウイメンズ広島カレッジの学習プログラム構成が行われた。次に、ウイメンズ広島カレッジの学習プログラム構成の基本的視点、および実践プログラムについてみていこう。

(1) 学習プログラム構成の基本的視点

ウイメンズ広島カレッジの企図は、「男女共同参画型社会の形成を目指して、女性が多様な能力を発揮し、社会のあらゆる分野へ参画していけるよう、女性の多様化、高度化した学習要求に即応しながら広島の課題を認識し、国際人としての力量、日本人が不得意とするコミュニケーション能力を高め、自己開発していく女性の育成と発掘」にある。この企図に基づき、ウイ

メンズ広島カレッジの学習プログラムは、①ひろしま学、②自己表現、③現代的課題の三層で構成することを基本としている。

①ひろしま学

学習プログラムの第一層目は、わが街広島について学ぶ「ひろしま学」である。自己は環境との相互作用で形成されているので、「ひろしま学」では、自己と自己をとりまく環境（広島）について省察を行い、自己の体験と体験の場を捉え直し、そのことを通して広島の課題を認識し、国際人としての力量を高めることをねらいとしている。

②自己表現

学習プログラムの第二層目は、ディベートを中心に自己表現力を培うことをねらいとしたものである。男女共同参画型社会の実現を図るには、とりわけ女性の自立、自己表現、具体的行動に係わる力量の形成が前提条件となる。そのため、このプログラムでは女性のエンパワーメントの一環としてディベートを位置づけ、この実習を通して表現力を身に付け、自己表現力とりわけ自己の社会的表現力の育成に配慮している。

③現代的課題

学習プログラムの第三層目は、現代的課題（生活課題）に対応するための生活技術的なスキルの育成を図るものである。①、②で学習したことを実生活に反映させるためには、このような力量が必須だからである。

なお、「現代的課題」に関する学習内容の構成に際しては、市立大学に国際学部と情報科学部が設置されていることもあり、文部省ガイドライン¹²⁾中の「情報活用能力の育成に関するもの」、「国際理解・国際協力に関するもの」を取り入れている。また、学習方法は、従来のように講義一辺倒ではなく、討議や演習、さらに大学の施設を利用したコンピュータなどの新しい情報機器等の活用などの多様なスタイルが用いられている。

(2)実践プログラム

ウイメンズ広島カレッジでは、(1)の基本的視点を踏まえて、表2-1のような学習プログラム（平成7年度）を具体的に設定している。

実践プログラムの「ひろしま学」の特徴は、「ひろしま」をそれぞれ「広島」、「広島」、「ヒロシマ」、「HIROSHIMA」の4つに表記している点に端的に見受けられる。過去、現在、未来を含めた様々な角度から「ひろしま」を学び、日常的経験環境としての地域との係わりの中で自己の経験に省察を加えることをねらいとしている。

表3-1 ウイメンズ広島カレッジの学習プログラム
（平成7年度）

月 日	テ ー マ
7/29	ウイメンズ広島カレッジ受講にあたって （事前研修）
8/22	わたしの考える広島 ～21世紀に向けての広島と平和～
9/9	核文明の原点・広島 ～平和記念資料館東館の開設をめぐる～
9/16	芸術とヒロシマ ～近・現代美術を中心に～
9/30	哲学とHIROSHIMA ～原爆ドームのある街にくらす意味～
10/7,14, 28,11/4	実践ディベート
10/21	ディベートデモンストレーション
11/11	現代のメディア環境 ～コミュニケーションと情報メディア～
11/18	挑戦しよう！ ニューメディア・インターネット入門
11/25	国際化時代の人権問題 ～なぜあなたはかけがえのない存在か～
12/2	自分の持ち味と他人の持ち味 ～自分や他人とつきあうとき～
12/9	“わたし” 発見 ～カウンセリングの視点から～
12/16	ウイメンズ広島カレッジに参加して （事後研修）

次に、ディベートは、「ディベートデモンストレーション」を含めると計5回（全16回中）実施され、自己表現力の育成が重要視されていることがうかがわれよう。

第三層目の現代的課題では、国際化、情報化等の現代的課題に対応したテーマを設定している。特にインターネットを利用した個人による情報発信や、国際化時代の人権意識について学ぶことはエンパワーメントに役立つ。即ち、現実の生活課題に直結したスキルの育成とともに、自己表現の新たな手法や、在日外国人の増加に伴う「内なる国際化」に対応した「他者理解」の意識を身につけることができるからである。

IV. 受講者の反応

さて、以上のような構想に基づいて展開されたプログラムに対して受講者は、どのような反応を示したのであろうか。ここでは、実態調査を通して受講者の反応を分析し、今後に残された課題を明らかにしてみよう。

(1)受講者の属性

まず、フェイスシートで年齢別に受講者の特性をみると、30～40歳代が全体の3分の2を占めており、

表4-1 学習の方法

	いつも 行なった	時々 行なった	あまり行な わなかった	全然行なわ なかった	加重平均
予習	0 (0.0%)	4 (11.1%)	12(33.3%)	20(55.6%)	1.56
復習	0 (0.0%)	15(41.7%)	16(44.4%)	5 (13.9%)	2.28
講師への質問	0 (0.0%)	5 (13.9%)	12(33.3%)	19(52.8%)	1.61
実技, 実習への参加	7 (19.4%)	20(55.6%)	6 (16.7%)	3 (8.3%)	2.86
関連する書物の利用	0 (0.0%)	16(44.4%)	17(47.2%)	3 (8.3%)	2.36
図書館などの利用	1 (2.8%)	7 (19.4%)	14(38.9%)	14(38.9%)	1.86

一般的な女性の学習機会に比べて、生活経験の豊かな人が参加していることがうかがえよう。この点では、リーダー養成という目的に合致した予期どおりの結果といえよう。

次に職業別にみると、主婦専業が4割弱、パート・アルバイト(16.0%)を含めると、職業従事者は5割弱を占めている。本事業のように48時間という長期プログラムの場合、それが職業従事者の参加をどのように規制しているのか、今後追跡を要する課題といえよう。本事業は、婦人教育会館が大学と連携して事業を展開する、いわば広域的学習サービス事業であるが、この趣旨に沿ってサービスエリアも居住区別にのみ限り、婦人教育会館の所在する旧市街地を越えて拡大している。

ところが、ウイメンズカレッジを知った情報源としては、広島市の行政広報紙(「市民と市政」)と婦人教育会館とで9割強を占め、公民館は極めて少数(4.3%)である。この事実は、地域の拠点である施設である公民館を組み込んだ、本事業の広域的学習情報サービス網の構築が課題であることを示しているといえよう。

(2)参加理由の分析

ウイメンズ広島カレッジに参加した人たちは、どのような動機や理由で本事業に参加したのであろうか。ボーシャー(Boshier, R)¹³⁾によれば、学習への参加理由は、当該の学習活動に取り組む際の志向によって、①学習そのものを追求する「学習志向」(例:学ぶこと自体が楽しいので)、②学習活動がもたらすものの中に意味を見いだす「活動志向」(例:仲間ができたり、一緒にやる楽しみがあるから)、③明確な目標を達成するための手段として学習を行う「目標志向」(例:仕事や生活に役立てるため)の3つに大別できるという。そこで、ボーシャーの48項目よりなる学習参加スケールを使用して本事業への参加理由を調べ、上記の3つの志向に従ってカテゴリ化を試みた。その結果、各カテゴリ別の平均値は、それぞれ「学習志向」(3.92)、「活動志向」(3.67)、「目標志向」(1.94)となり、「学習志向」と「活動志向」が参加理由において強いこと

が判明した。この種の調査では「活動志向」が最も強い要因である場合が一般的であるが、本事業では、「学習志向」が最上位に躍り出ているのが目立つ。学習経験の豊かな人たちが多数参加しているという事情を考え合わせると、いわば生涯学習者(lifelong learners)と呼ぶべき学習好きの受講者が少なくないことが読み取れよう。

ところが、本事業の終了時のアンケート分析の結果(表4-1)からみると、今回の講座への参加の仕方に関しては、以外にも、予習、復習、講師への質問、関連する書物の利用、図書館利用等、学習者の主体的活動の側面については消極的な態度が目立ち、承り学習の域を出てはいないとの印象を免れ得なかった。学習主体の形成がなされないとエンパワーメントにはつながりにくいことはいままでもない。これらの事実は、学習主導性を啓発するプログラムの開発が引き続き課題であることを示しているといえよう。

(3)講座に対する満足度

講座に対する満足度は、全体的にみて非常に高い。個別にみても学習内容の理解度、学習内容の新鮮度、技術・知識の更新・向上への学習内容の貢献度、学習意欲の高揚度などの項目において比較的高い満足度を示している。またプログラムの基本視点である三層構造については、受講者の修了レポートでも「この三つの柱は、今後も変えるべきではないと思う」(M.Eさん)と好意的に受けとめられていた。一方、学習目的の達成度や学習内容の難易度水準の項目については、満足群と不満足群に二分された状況が見受けられるので、今後プログラム内容を各人の目標や学力水準と照合して検討する必要がある。

学習プログラムに対する満足度としては、「核文明の原点・広島」(4.5)、「ディベートデモンストレーション」(4.31)、「私の考える広島」(4.26)の得点が高く、本プログラムの主旨である「ひろしま学」についての認識深化、自己表現力の育成が受講者の意向に見合ったものであったといえよう(図4-1)。

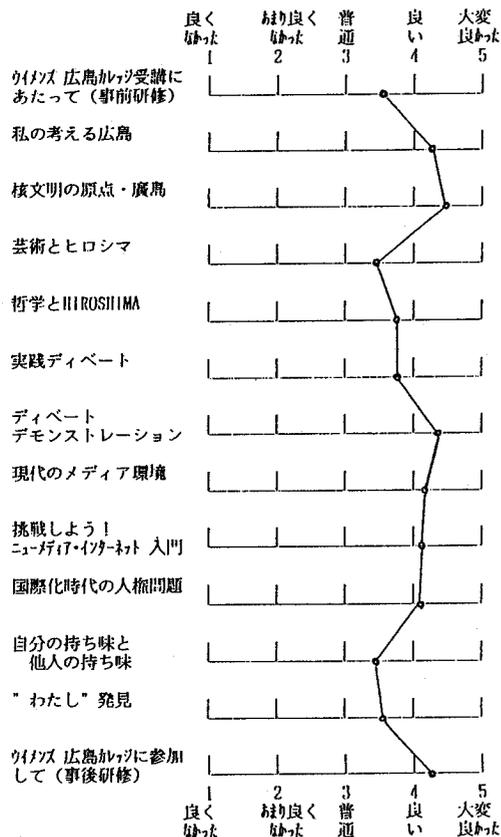


図4-1 学習プログラムに対する満足度

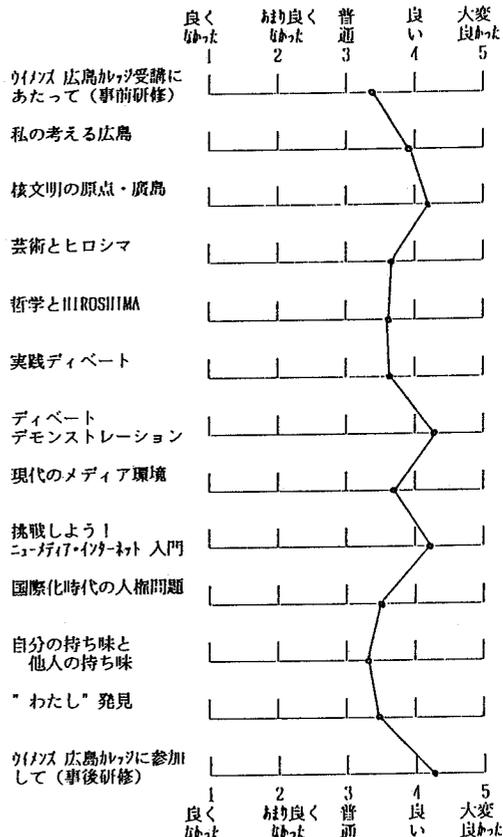


図4-2 学習方法に対する満足度

学習方法に対する満足度は、「ディベートデモンストレーション」(4.21)、「ニューメディア・インターネット」(4.16)などの得点が高い。「ディベートの講義は、かねてから勉強は一人でするもの、と考えていた私のような教師に、新たな視点を与えてくれた」(H.Iさん)、「ディベートをにわか仕立てながらも自分がやってみたという経験は、とても貴重でした」(M.Fさん)、「インターネット入門の講義は興奮の思いで受講しました」(K.Tさん)、「できればもう少し時間を多くとっていただければ、もっと良かった」(E.Aさん)等の感想もみられ、単なる座学以外の実習実演を伴うものが効果的であったことを意味している(図4-2)。

(4) 今回の講座における学習条件の満足度

今回の講座の学習条件の中、「指導講師」、「学習の場所」、「学習の曜日」、「学習の開始・終了時間」、「一回あたりの学習時間数」、「全体の学習時間数」、「家族の理解や支援」、の7項目については、相対的に満足度は高い(表4-2)。特に、「指導講師」、「学習の場所」

に関しては、「市立大学での講座は学生時代を思い出し、若さあふれる先生方がまぶしく見えました」(N.Yさん)、「先生方も本当に熱心で、忙しい時間をさいて手をぬかない授業をしてくださった」(M.Eさん)、「久しぶりに学生に戻ったようで、何となくワクワク、ドキドキしました」(H.Nさん)、「講義が時々市立大学で実施されたことは気分を変えるのに良い機会であり、行き帰りの電車の中で友と雑談できたことも良かった」(H.Aさん)等の感想が挙げられた。市立大学との連携による新たな学習環境創出の試みが、プログラムの高度化・体系化だけではなく、受講者の学習意欲の向上にも効果をあげたようである。

しかし、「講座参加者の相互交流」、「学習のための情報の提供」、「講師による学習相談」、「学習成果についての職場・家庭での対応や評価」、「修了証書の効用」、の5項目については、満足度は相対的にはそう高くはなく、なお課題を残している。特に本事業のように生涯学習施設と大学との連携事業の場合、一層きめ細かい学習情報の提供や相談事業の開発が望まれよう。

表4-2 学習条件の満足度

	とても満足	まあ満足	どちらとも いえない	やや不満	とても不満	無回答	加重平均
指導講師	7(19.4%)	22(61.1%)	6(16.7%)	1(2.8%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.97
学習の場所	10(27.8%)	21(58.3%)	3(8.3%)	2(5.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	4.08
学習の曜日	12(33.3%)	9(25.0%)	11(30.6%)	3(8.3%)	1(2.8%)	0(0.0%)	3.78
学習の開始・終了時間	9(25.0%)	15(41.7%)	5(13.9%)	7(19.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.72
一回あたりの学習時間数	8(22.2%)	18(50.0%)	6(16.7%)	4(11.1%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.83
全体の学習時間数	6(16.7%)	17(47.2%)	8(22.2%)	5(13.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.67
学習機会に参加するための職場の理解	1(2.8%)	3(8.3%)	5(13.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)	27(75.0%)	3.56
学習のための職場からの時間的配慮	1(2.8%)	3(8.3%)	3(8.3%)	2(5.6%)	0(0.0%)	27(75.0%)	3.33
家族の理解や支援	19(52.8%)	8(22.2%)	6(16.7%)	1(2.8%)	0(0.0%)	2(5.6%)	4.32
講座参加者の相互交流	3(8.3%)	18(50.0%)	7(19.4%)	8(22.2%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.44
学習のための情報の提供	0(0.0%)	12(33.3%)	17(47.2%)	7(19.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	3.14
講師による学習相談	0(0.0%)	1(2.8%)	22(61.1%)	11(30.6%)	0(0.0%)	2(5.6%)	2.71
学習成果についての職場・家庭での対応や評価	2(5.6%)	8(22.2%)	23(63.9%)	0(0.0%)	1(2.8%)	2(5.6%)	3.29
修了証書の効用	3(8.3%)	7(19.4%)	19(52.8%)	0(0.0%)	1(2.8%)	6(16.7%)	3.67

V. ウイメンズ広島カレッジの学習成果

最後に、受講者の修了レポートの分析を通して、女性のエンパワーメントの観点から、ウイメンズ広島カレッジの学習成果について考察していきたい。ここでは、平成7年度を受講者から提出された修了レポート(26件)を分析をした。分析の視点として、天野正子の指摘する¹⁴⁾、女性一人ひとりが力をつけて、下から上へ“ボトムアップ”で社会を動かしていくことや、社会のシステムや文化を自分たちの手で変えるという女性の主体的な姿勢を形成していくプロセスを拠り所とした。具体的には、まず、女性が自分のなかの女性問題に気づき、問題を発見する力をつけ、さらに、問題の背景を読みとく力、問題解決の方法を考えて提案していく力をつけることが求められており、このプロセスを通じて女性のエンパワーメントが達成されるのである。

そこで、この女性の社会参加のプロセスに基づいて、

①自分や自分自身をとりまく問題へ気付く、個人の意識や価値観の変容段階、②個人的活動への志向が育っ

た段階、③社会的な活動を志向する段階、という3つのレベルを設定した。

①個人の意識や価値観の変容

受講者個人の意識の変容については、大きくは3つのタイプに分類できる。まず、生活のなかで今まで気付かなかったことに気付くようになったものであり、意識変容の初歩的な段階といえるものである。例えば、「今までは適当に読んでいた(国際問題などの)新聞記事が、なんと身近になったことか」(I.Tさん)、「先入観という言葉があるが、自分の勝手な思い込みの多いことに気づいた」(I.Tさん)、「嫌だと思った講座も、聴いてみるとそうなのかと入り口でもわかったことは幸いです」(K.Mさん)、「私のような(女性問題学習に)全く意識のなかつたものを気づかせてくださった」(K.Tさん)、「一つの講座が終了するたびに新しい知識が増え、自分自身が豊かに成長した」(S.Iさん)などのようなものである。

次に、同じ目的を持った受講者からの感化がある。「職業を持った方、若い方、向学心に燃えた方々の中で受

講できたことは私にとって良い励みとなった」(H.Aさん)「自分の中の違う一面、今まで隠していた一面と同じようなものを持っている人たちに巡り会えた気がした」(Y.Sさん)などのように、共通の目的を持った受講者同士の交流が活発であったことが指摘できよう。

最後に、学習活動を通じた意識の変容としては、「国際化時代の人権問題の講師による『社会的な問題を考えることは自分の一番大切な人との関係を考えること』という指摘に共感を覚え、人権問題を身近かに捉えることができるようになった」(M.Fさん、K.Sさんなど)、というものがあつた。

ディベートのクラスの成果としては、「私たちは努めて、相手に伝え、そして相手を知るべきだと思う」(Y.Sさん)「自分の考えや意見を、自分の中にとどめておくのではなく、人に伝えていきたい」(I.Hさん)、「他人と意見交換していきたい」という意見もあつた。さらに、日常生活における省察の視点から「家計簿と日記をつけてみよう」(T.Wさん)、「現在の自分に責任を持つ」(H.Nさん)、「5年後、10年後につながる『自分探し』を始めたい」(M.Nさん)などの意見がみられた。

②個人的活動への志向性

個人的活動の志向としては、2つの方向性が認められた。まず、多くの参加者の指摘にみられる「何らかの学習活動を継続していきたい」という自己啓発を志向するものである。もう一方は、個人として社会的活動に関わっていくことを志向するもので、「自分が今できることを考え、活動を始めたい」(T.Wさん、E.Aさん、H.Iさんら多数)というものである。自己啓発的な活動の希望としては、「海外の方との通信もでき、買い物もでき、ニュースも、いち早く伝わるコンピュータを、若者に負けず扱いたい」(M.Aさん)、「本を読むなどして勉強したい」(T.Yさん)、「今の自分にできることは、職場や家庭の中で、やるべきことをきちんとこなしていくこと」(M.Fさん)などの声があつた。社会的活動を希望するものとしては、「婦人教育会館の施設ボランティアとして、今後の会館の学習活動に加わることで、自分自身も成長していきたい」(S.Iさん)という希望が多かつた。また、「学ぶことにより自分自身が成長するだけでなく、成長した部分を他の人や社会に還元していきたい」(S.Iさん)や、「お互いが共に活かしあって共存していく世界を創るために、及ばずながら広島市民の一人として努力させていきたい」(C.Tさん)「学んだことを地域に還元することが、より豊かな充実した広島源になると思います」(K.Tさん)、「一つでも多くの知識を

得て、つながりを持って(地域社会に)帰りたい」(S.Mさん)、「よそ者の目と感覚を持って地域に根をおろした活動を始めたい」(広島在住2年半のM.Sさん)などの意見にみられるように、「ひろしま学」の学習をきっかけに、地域社会との関わりを希望する人も増えている。

③社会的な活動への志向性

ここでは、「受講者によるグループでの学習を継続していきたい」(M.Mさんら多数)という意見が最も多く、「さらに勉強を重ねて日本国内に向けて何らかの働きかけができるようにしたい」(M.Sさん)などの意見にみられるように、受講者相互のネットワークによる活動を希望する人が多くなっている。また、婦人教育会館内の他のグループやボランティアグループとの連携を希望する意見もみられた。具体的な活動としては、広島市が提唱する「まちづくりボランティア20万人計画」へグループとしての参加を希望する意見(K.Mさん)があつた。

以上、修了レポートの内容をみる限り、受講者の学習意欲や個人レベルでの社会参画に対する意欲は高まってきており、ウイメンズ広島カレッジは一定の成果をあげることができたといえよう。しかしながら、厳密な意味での女性のエンパワーメントの視点から、女性をとりまく問題状況への気づきを指摘した人は少数であつた。このまま、自己啓発や受講者の交流のレベルに留まってしまうと、旧来のソーシャルライフ型の学習を踏襲してしまうことになりかねない。今後の課題としては、学習プログラムをさらに体系化させることにより、女性のエンパワーメントという視点をより明確に打ち出していくことがあげられよう。また、修了者を対象として、さらに高度な知識や技術を身につけていくための学習機会を提供していくことも必要となるであろう。

結びにかえて

これまでみてきたように、ウイメンズひろしまカレッジは、生活経験・学習経験ともに比較的豊かな女性を対象に、女性リーダーの養成を目的とした高度で体系的な学習機会の提供を意図している。

このような特質に照らして本事業の実施を点検してみると、受講者の事業に対する満足度は高いものの、なお、学習プログラムが、受講者の生活経験と学習による省察とが絡み合つて学習サイクルに沿って発展する構造に、どの程度タイトに構築されているかという

と問題なしとしない。さらに、このような学習プログラムのコアを取り巻く学習条件の周辺の整備についても本事業のような広域的学習サービス網に見合った条件整備が引き続き検討課題であるといえよう。

また、女性のエンパワーメントの視点からは、従来の意識改革のレベルから発展して、個人的活動を志向する人々が増えたことは評価できる。しかし、女性問題学習、とりわけ女性自身の持つ性別役割分業意識を克服するための方策については、引き続いて検討されなければならない。さらに、社会的活動の促進・支援方策の一層の整備・充実も今後の課題である。

註・引用文献

- 1) J.フリードマン著/斉藤千宏・雨森孝悦監訳『市民・政府・NGO—「力の剥奪」からエンパワーメントへ』新評論, 1995年, 9-10頁。
- 2) 矢澤澄子「女性のエンパワーメント」井上輝子・江原由美子編『女性のデータブック(第2版)』有斐閣, 1995年, 184頁。
- 3) 近年は、「婦人」よりも「女性」のほうが適切な表現だということで「国際女性年」と言われることも多い。例えば『女性のデータブック(第2版)』有斐閣, 1995年, 180頁。
- 4) 矢澤澄子「都市形成とジェンダー—現代都市とジェンダーアプローチ」『日本都市社会学会年報』第12号, 1994年, 40-41頁。
- 5) 小玉美意子「国際間の対立から市民的ネットワークへ—歴史的転換を示した北京・世界女性会議」『マス・コミュニケーション研究』第49号, 1996年, 48-59頁。
- 6) 神田道子「これからの女性の生き方」神田道子・木村敬子・野口眞代編著『新・現代女性の意識と生活』日本放送出版協会, 1992年, 243-250頁。
- 7) Knights, S. "Reflection and Empowerment in the professional Development of Adult Education" in J. Mulligan and C. Griffin (ed.), *Empowerment Through Experiential Learning: Explorations of Good Practice*. London: Kogan Page, 1992, pp.170 - 177.
- 8) Droegkamp, J. and Taylor, K. 'Prior Learning Assessment, Critical Self-Reflection' in K. Taylor, and C. Marienau (ed.), *Learning Environments for Women's Adult Development: Bridges Toward Change*. New Directions for Adult and continuing Education, no.65. San Francisco: Jossey - bass, Spring 1995, pp.29 -

36.

- 9) 森実「男性読者のための女性問題学習の新しいキーワード」『社会教育』1995年12月, 19頁。
- 10) Kolb, D.A. and Fry, R. 'Towards an applied theory of experiential learning', in C.L. Cooper, (ed), *Theories of Group Process*. London: John Wiley and Sons, 1975, pp.33 - 7.
- 11) Jarvis, P., *Adult and Continuing Education*. 2nd. ed., London and New York: Routledge, p.110 - 114.
- 12) このほかに「職業の管理・経営能力の開発」, 「生涯学習活動及び方法等の指導」, 「家庭教育」, 「家庭経営・消費生活」, 「女性学」, 「ボランティア活動」そして「カウンセリング」などが学習内容の例として提示されている。
- 13) Boshier, R., 'Motivational Orientations of Adult Education Participants: A Factor Analytic Exploration of Houle's Typology', *Adult Education*, vol. XXI, No.2, 1971, pp.3 - 26.
- 14) 『東京女性財団ニュースあしたの東京』第14号, 1996年8月, 2-3頁。

参考文献

- ・井上輝子『女性学への招待』有斐閣, 1992年。
- ・伊藤公雄『男性学入門』作品社, 1996年。
- ・伊藤雅子『女性問題学習の視点—国立市公民館の実践から』未来社, 1993年。
- ・『解放教育』特集・女性の教育とエンパワーメント』第322号, 1995年1月。
- ・神田道子「女性の性役割意識—婦人問題解決のための学習の基礎として—」『東洋大学文学部紀要』第34集教育学科・教職課程編VI, 1981年。
- ・神田道子「情報化と女性の学習」『東洋大学文学部紀要』第42集教育学科・教職課程編XIV, 1988年。
- ・神田道子「男女平等をすすめるための国内行動計にみられる教育政策—「国内行動計画」から「新国内行動計画」の間」『東洋大学文学部紀要』第46集教育学科・教職課程編XVIII, 1992年。
- ・目黒依子『個人化する家族』勁草書房, 1987年。
- ・目黒依子編著『ジェンダーの社会学』放送大学教育振興会, 1994年。
- ・三輪建二『現代ドイツ成人教育方法論—成人の日常意識とアイデンティティ—』東海大学出版会, 1995年。
- ・村松安子・村松泰子『エンパワーメントの女性学』有斐閣, 1995年。

- ・ 日本女子大学女子教育研究所編『生活学を学ぶ－ウィメンズ・ライフロング・カレッジの実践』ドメス出版, 1993年.
- ・ 佐々木正治「成人の学習動機に関する実証的研究」『教育学研究紀要』中国四国教育学会, 第26巻, 1981年.
- ・ 関啓子「女性の生活と学習－社会参加と生涯学習－」『一橋論叢』第108巻第4号, 1992年10月.
- ・ 『社会教育』「特集・第4回世界女性会議を通して女性問題を考える」全日本社会教育連合会, 第50巻12月号, 1995年.
- ・ 志熊敦子編著『女性の生涯学習』全日本社会教育連合会, 1993年.
- ・ Usher, A. 'The Experience of Empowerment', in F. Cassidy and R. Faris, (ed), *Choosing our future: adult education and public policy in Canada*. OISE Press, 1987, pp.188 - 196.
- ・ 矢澤澄子「大都市婦人行政と女性の市民活動－国連婦人の十年とこれから－」『横浜市立大学論叢』第38巻社会科学系列第1・2・3合併号, 1987年.
- ・ 矢澤澄子編著『都市と女性の社会学－性役割の揺らぎを超えて』サイエンス社, 1993年.

[付記] 本研究の調査の分析にあたっては、広島大学大学院博士課程前期の石木孝之氏のご協力を得た。特に記して感謝の意を表したい。